

## 終戦とシベリア抑留記

愛知県 齋藤 高志

### 終戦前後

私達第一〇八師団第二四一連隊第三大隊は、昭和二十(一九四五)年七月初め、外蒙からソ連軍の侵攻があるというので、興安西省の林西に戦車壕を掘るため阜新(旧満州国錦州)を無蓋車で出発し北上した。途中で八路軍(抗日戦線の国民革命軍)の抗日活動が活発になったので、急遽討伐に変更された。

私は幹部候補生の教育をしていたので、大隊本部と行動を共にし万里の長城を越えて北支の建昌營で駐屯し、討伐をしながら教育に専念していた。各中隊は北支の各地で戦闘し、また、数多くの邦人の救出までした。

八月十日頃でしたか、教育中に非常がかかり直ちに出発、川を渡ったら大きい集落の広場にトラックが待っていた。トラックは平常の木炭車と違い、新しいガソリン車であった。これはただ事ではないと直感した。各中隊は平泉に集合した。ここで教育隊は解散し、候補生を各中隊に編成替えした。私は平泉から軍旗護衛をして、連隊本部と共に阜新に帰った。

阜新の中隊には残留者が三人しかいなかった。翌十三日には在満者の最後の召集兵が十人ばかり入隊したが、残留者と私だけではどうすることも出来ず、入隊時の背広服のままにしまった。十五日には連隊本部で玉音放送があったが、隊内の大部分が不在で、集合の命令もなかったから聞いていない。十六日に中隊長以下全員が阜新に帰隊したので、召集兵も軍服に着替え、やっと軍人らしくなった。

連隊は十八日、戦後の混乱で信号もない鉄道で遼陽に行き、大きな紡績会社の倉庫に入った。夕方には将校による軍旗の奉焼があった。翌日には、長い間尊敬して来た菊の御紋章のついた、十一年式軽機関銃、擲弾筒、帯剣など兵器をすべて返納した。みんな、ただ黙々として兵器を置く姿が哀れであった。

返納後、夜行軍を含めて、海城の収容所に集合した。ここで、各地から集まった者が収容されたが、十日ばかりの収容所の生活の中で、開拓団の独身の若者が、帰国するなら入れてくれと入る者、逃亡する者等があった。海城から千五百人単位で編成され順次出発した。私達は第五大隊となって北に向って出発した。

この駅の引込み線で一週間ばかり車内で生活し、その間に衣服の滅菌と入浴をした。列車はなおも北上し、カリムスカヤに着いたのは真夜中であった。列車よ東に走ってくれ、東に行けば帰国出来るかも知れない。夜のシベリア鉄道を走りながらみんな神に祈った。淡い期待も無残に打ち砕かれ、列車はなおも西へ西へと走り続け、夜が明けたらなんと広々とした銀世界であった。

北上中興安嶺の手前の小さな駅でトラブルがあった。私達の大隊は航空隊と編成されたが、航空隊は将校が多く、航空隊の将校が(将校の帯刀は私物で返納しなかった)抜刀して、「ソ連は嘘ばかりいうから列車には乗らない」とすごんだ。ソ連の輸送指揮官から「シベリア鉄道が空いているので、カリムスカヤ経由でウラジオストクから帰国する」と言われ、みんな半信半疑であったが乗車した。列車はなおも北に進み、ついにハルピン

### ゲネラルパーティ

昭和二十年十月二十四日、列車の着いた所はヤブノロワヤという小さな駅で、今までダモイ東京、ダモイ東京と言いつけてきた輸送指揮官も歩哨もいつの間にかいなくなり、新しい指揮官と歩哨が待っていた。この小さな駅から各隊、各方面に分かれて雪の中に消えていった。

私達朝藤隊、長尾隊二百人が最初のラーゲル(収容所)ゲネラルパーティに向った。その頃は個人の私物も、中隊の食糧も沢山あり、人里離れた深

い雪の山道を重い荷を背負い、延々と二時間も歩いて、やっと現地ゲネラルパーティにたどり着いた。

そこで柵(三・五メートルぐらいの丸太の先を鉛筆のように尖らせ、並べて埋めたもの)の中に追いつ込まれた。柵内は切捨てられた落葉松の枝が山積みしており、まだラーゲルの建物も出ていなかった。ここが今から生活するラーゲルかと思うと情けなかった。

その後は雪の降る中での野宿で、焚火をしながら夜を明かし、ラーゲル造りという苦しい毎日であった。食事は朝夕はカーシヤ(米・高粱などを煮たお粥)、昼はパン(青カビで小さかった)。

一カ月も全員で作業して、二段式の宿舎が出来た。ゆっくり休めるかと思つたが、翌日には私達朝藤隊の百人は一山越えた所に移動した。今まで一生懸命に造つたラーゲルは第五一八作業大隊の病院になるのだといつていた。

ハウザンカ

に仕事ははかどらなかつた。二日間が終つた時、今まで切つた材木(ドラワー)を一カ所に集めたらやつと六立方メートルあつた。これが二人一日分のノルマと聞かされ唖然とした。

翌日から夜明け前に起こされ、作業所で作業をした。帰りは暗くなるまで働かされた。それでも規定のノルマに達せず、徹夜をして朝帰ることも度々あつた。もちろんその日は夕食抜きである。

「窮すれば通ず」こんな日が続いたある日、こんな事を言う者があつた。

「切れない鋸でいくら頑張つても、ソ連のいうノルマは完遂できない」なるほどの通りである。それでは、よく切れる鋸で作業するにはどうしたらよいか、毎日みんな考えた。そのためには、鋸の目立ての出来る人をラーゲルにおき、昼は寝、みんなが寝ている時に目立てをして、翌日はその鋸で作業をする。そうすれば、作業能率は上り、検収員を喜ばすことも出来るとの結論に達した。だが、ソ連側との交渉が問題である。中隊長は毅

移動した所はハウザンカといった。十人くらい入れる小さな小屋が並んでいたので分隊ごとに入った。ソ連の囚人が作業した所で、伐採の跡が残つていた。柵が無いので抑留者の気分はしなかった。しかし、夜になると狼が出没するので、便所は宿舎から遠くに行くことは禁止された(便所が無いので野糞である)。

#### ① 伐採作業

ここで初めて伐採作業が始まつた。二人が一組になって斧(タポール)と鋸(ピラー)を持ち、午前八時から午後五時まで、ノルマ(規定の作業量)に向つて伐採作業をした。主に落葉松の直径十五〜二十センチメートルぐらいの立木が多く、この木を根倒して斧で枝をはらい、幹を二メートルに切り、切断された幹を一カ所に集めて一・一メートルの高さに積み、最後に枝の処理をして作業を終える。(枝の処理は、雪のある時は焼却、無い時は山のように積んでおく)これが伐採作業である。何しろ不馴れと鋸の切れが悪かつたので、思うよう

然として交渉した。交渉は案外すららと成功した。作業能率も非常によくなり、みんなも頑張つた。それでも伐採作業はきつく、食糧事情もよくないので、作業からの帰りはいつも遅かつた。ラーゲルには電灯もないので、明るさと暖を取るため白樺の皮を燃やしたが、油煙で顔も衣服も真黒になつた。

#### ② 馬も人間だ

ソ連の実情や習慣を知っておかなければいけない事を、身をもって体験した。伐採作業も終り、次は樅作業と自動車積込みに分かれた。私は樅作業に回された。樅作業とは、伐採して積上げた材木を、自動車積込みの広場まで馬樅で運ぶ仕事である。

ようやく白みがかつた酷寒の朝、手袋を取つて馬具をすばやく馬に着装し、白樺の木で作つた樅をこの馬につけ、一キロメートルもある作業現場まで馬と共に歩いて行く。栄養失調の者には、歩くことが大変である。樅の中は一メートルで一回

に運べる量は一立方メートルである。一日のノルマは八立方メートルである。昼も近く、人間も馬も空腹と疲労で気が立っていた。ノーノー(馬を追う声)といっても動く気配さえない。ついに怒って近くにあった木ぎれで、馬の尻を殴打した。これがいけなかった。自動小銃を持ったカンボーイ(歩哨)が、つかつかと来たと思うと持っていた鞭で、私の背中を思いきり殴って咆哮した。私は失神してその場に倒れたが、ややあって同僚が、「馬も人間と同じだ、馬をたたく奴はたたかれる」と怒鳴ったといった。私は無性に悲しかった。

サハリン

### ①気候・生活

昭和二十一年六月頃サハリンに移動した。ここにはすでに入山していた中隊がいた。私の抑留生活二年九カ月のうち、最も長く、最も苦しい所であった。サハリンの生活で骨身にこたえたのは、苛酷な労働、粗悪な食事による飢餓、そして厳しい寒さであった。

能率を下げた。シベリアは春・夏・秋の季節は短く、夏が終れば秋をとばして冬の感がある。

### ②乏しい食糧

厳しい労働を強いられながら、それを補う食糧は極度に乏しく、また、粗悪であった。飢えて痩せ衰えた体に酷寒、重労働が重なって、ちよつとしたことが死につながり、多くの人が死亡した。

当時のソ連の捕虜取扱規則によると一日に、

- 黒パン 三〇〇グラム
- 獣肉 五〇〇グラム(骨、内臓を含む)
- 雑穀 三〇〇グラム
- 野菜 六〇〇グラム
- 塩 一〇グラム
- 砂糖 一五グラム(キャラメルの時も)
- 油 五グラム

これなら結構な量である。しかし、抑留者に渡ったのは桁外れに少ない。大方は二〇〇グラムにも足りない黒パンが弁当(実際には朝食に食べた)。朝夕はカーシャ、もちろんうすいで箸の必要は

ラーゲル内の生活は、着の身着のまま作業から帰れば、夕食のカーシャをすすって、外套にくるまって倒れるように寝るのが毎日の生活であった。歯は磨かず、もちろん顔も洗わない。バーニヤ(入浴)も在ソ中(二年九カ月)一度も入ったことはなかった。従ってシラミは湧き、衣服の縫目はシラミの卵や死骸でぎらぎら光っていた。

雪は九月頃から降るが(入ソ二年目の初雪は八月三十一日であった)、この雪は降ったり消えたりする。翌春まで残るのは十月中旬の雪である。積雪は年間を通じて多い所で一メートルぐらいである。雪は多くはないが、冬期はことに寒く、気温は零下二五度、三〇度は常である。冬中は滅多に降らないが、四月中旬に雪が降りだすと、地方人は、雪が降るようになったから暖かくなるよという。五月の終り頃までは雪があり朝夕は寒い。六月上旬までは道の轍は凍っている。六月中・下旬になると急に暖かくなる。湿気が少ないので、夏は蒸し暑くはないが、山の中はブユが多く出て作業

なく、すするだけであった。特に生野菜の量が少なく、春になればアカザを茹でて食べた。これは、ソ連の管理者や糧秣受領者がピンハネしたり、地方人に横流しされ、その残りが抑留者の食糧となったためである。

当時こんな川柳が盛んにいわれた。

「末世かな 高粱、米をはりたおし」

当然米の方が美味しく、高粱の比ではない。しかし、カーシャにすると、米は三倍にしかのびないが、高粱なら四倍にのびる。同じ目方なら高粱のカーシャの方がかたくなるので珍重がられた。

「五分確保 水くみノルマ 一度ふえ」

カーシャはうすくとも、一人で飯盒に半分は食べたい。これがみんなの願いであった。この願いを満たすためには、水汲みは一日のノルマを一回余分にするという意。

昭和二十二年九月頃と思う。ある日、作業から帰って、みんな監視の中、白樺の皮を燃しての明りで食料を分配した時、ソ連の政治部長が突然来

て、分配された二人分を持って行った。チタ(シベリアの主要都市)で検査の結果、規定の分量とは格段の差があるというので、カマンジル(隊長)、カンボーイまで交代させられた。以後、糧秣受領は抑留者の炊事係がすることになった。それからの糧秣事情は少しよくなった。

### ③貨車積み

貨車積みは、労働時間にかかわらず、貨車が引込み線に入れば貨車積みである。

伐採作業や樞作業で一日のノルマを終えて、収容所に帰り、カーシヤをすすりごろりと横になった頃、貨車積みの命令が出れば、三キロメートルも離れたヤブノロワヤ駅の貨車積みの応援である。貨車積みとは、貨車の大小によって四人〜八人で長さ二メートルの材木を積むのである。時によっては、もっと長い建築用材を積んだ事もある(無蓋車)。貨車の奥は縦に積み、扉の所は横に積んで検査を受け、終れば扉をしめ錠をかける。早く終わった組は遅い組を手伝う。作業を終るのは明け方

作業所にも帰るよう指示があり、帰って装具の検査を受けた。本当に嬉しく、みんな有頂天になって喜んだ。

翌朝、装具を肩に、山道を延々とヤブノロワヤに向って歩いた。私達の乗る列車も引込み線に入り、糧秣を積んでいた。絶対ダモイだと信ずると同時に、今までの苛酷な労働も、飢えも寒さも忘れて、心は内地にとんでいた。一週間も待ったが、一向に乗車命令がない。いつの間にか列車は引込み線から消えていた。仕方なく重い装具を背負って、サハリンに逆戻りである。後から聞いた話によると、移動はダモイではなく炭坑行き計画であった。炭坑は食糧事情もさらに悪く、ノルマもきついついの事であった。クワバラ、クワバラ……

### ⑤ノルマに泣く

朝作業に出発時、寒風肌をさすような門の前で、人員の確認がある。カンボーイは掛け算が出来ないので一列に並ばせ、アジン、ドバー、ツリー(一、二、三)と真剣に数えるが、三十もいくと間違えて、

の時も、真夜中の時もある。終れば腹をすかして、また、三キロメートルもある山道をとぼとぼとサハリンに帰る。

### ④ダモイ騒動

昭和二十一年十月頃であった。コックリ様を使う人が、ヤブノロワヤ(第五一八作業大隊の中心部隊)にいて話題になった。何月何日何時には、材木を積込みの貨車が入る。それも十八トン車が何両、二十二トン車が何両と絶対当るとの評判であった。そのコックリ様が、十二月二十五日には、ダモイだということでみんな騒ぎだした。十二月二十日が過ぎると、もう仕事も手につかない状態だった。前日の二十四日は、特に寒い日でみんな伐採もせず、山の中腹で焚火を囲み、帰国の話に夢中だった。突然一人が「ダモイ」だと叫んだ。遠くの山裾を、伝令が馬に乗って勢いよく走り、ソ連の事務所に入った。同時に大勢のカンボーイが日本人の収容所に行き、病人など残留者の装具を検査しだした。みんな「万歳」と力いっぱい叫んだ。各

始めから数え直しをする。しかも、五回も六回も、五十人を数えるのに十分も二十分もかかる。冷たい雪の上で足踏みをしながら待つのが大変である。入ソ一年ぐらいからヤポンスキー、ガラー、ハラシヨウ(日本人は頭がいい)といつて、それから日本人が人員を確認するようになった。

伐採作業は特にきつかった。私の小隊の検収員は、融通のきかない二十歳ぐらいの女性であった。午前中は別に用事がないので山裾で私と雑談したり、半練の歯磨粉を白粉だといつて顔にぬり、ヤポンスキー(日本人)の娘さんより美しいと言っておだてているうちはご機嫌だが、午後の検査になると、極めて厳格で我々を困らせた。

或る日、検査の最後の組が伐採後、枝の始末がしてなく、雪の中にちらばっていた。いつものごとく、チースト、チースト(掃除、掃除)といつてきかない。疲労困憊している二人には、枝の片付けなど出来ないと思い「よし俺がやる。お前も見てください」といって二人を帰し、雪の中の枝を片付

けかけたが、どう考えてもやれるものではない。いつの間にか検収員もいなくなった。——「死のう」——後は何も考える余裕はなかった。寒いので今日伐採した材木に火をつけた。狼は近くで吠えているが火を見て近寄っては来ない。この火が消えたら俺の命も終りか……。こんな事をぼんやり考えていた時である。中隊長以下全員が松明を持って私を迎えに来たのである。収容所に帰ってから中隊長が、誰でも死にたいぐらい辛いんだ、だが命のある限りこの苦しい生活に耐え抜き、一人でも多くの抑留者を日本に帰すのが我々の務めだ。お互いに頑張ろうといわれ、私は自分の行為を恥じ、申し訳ない事をしたと思いい晩中泣いた。

#### ⑥便所

サハリンの収容所には、三百人ぐらいの抑留者が生活していたが、便所は一カ所しかなかった。縦八メートル、横四メートル、深さ二メートルの穴を掘り、足場は真直ぐな細い松の木を四本か五本、三十センチメートルおきに渡し、その上で用

を足した。冬はかがみ込むと尻がモゾモゾすることがよくあった。

落下物が凍って高くなっていくのである。高くなると鉄の棒で壊すのだが、この使役は、かけらが衣服について、暖かい部屋に帰った時、溶けて臭うのでいやだった。なるべく使用しないように、入口には「野糞励行」と札が掛けてあった。

#### ⑦女医さんの検診

三カ月ぐらいに一回、女医さんによる診察が行われた。颯爽とカートンキー（フェルト製の長靴）で闊歩する姿は、女医さんとは思えないほど勇ましい。

診察といっても内臓、血圧等はなく、ただ栄養失調の診察である。抑留者を裸にして女医さんの前に立たせ、大腿部をつねって皮の厚さ、筋肉の張り具合等を調べるのみで、一級、二級、三級、OK（オーカー）などが決定される。神経痛・リュウマチなどはわからないので病気ではないといわれ、該当者は大変苦勞した。一級、二級は健康で

普通作業、三級は軽作業、OKは要安静者として一カ月間作業を免除される。みんなOKになったかった。私も二回だったが、残念な事に休む機会には恵まれなかった。

一回目は、休養の代りに炊事の水くみにあてられた。炊事係は食が多いので、三週間で体重が六十五キログラムになり、途端に原隊復帰となって作業にまわされた。

二回目は、洗脳教育の一環であろう、チタ市での集合教育に派遣された。白樺の皮を燃しての原始的な生活から、明るい電灯の下での生活で、少しは人間らしくなった。しかし教育は重労働であった。朝八時から夕方まで共産党を主とした講義であり、夕食後は共産党史の映画であった。この一カ月間は追いつめられた生活で、非常に長く感じた。

#### ⑧壁新聞「大和」

飢えと寒さと厳しいノルマで、抑留者の体もだんだんと枯れていった。ラーゲルの中では黒パン

の盗難が多く、犯人はみせしめのためソ連側の命令で宿舍の出入口に荒縄で縛られ、三日目に死んだ。炊事の倉庫から糧秣を盗んだ者は、懲罰として営倉（地面を掘った穴で、暖房はない）に一夜放置された。「寒い、寒い。許してくれ、出してくれ」と泣き叫びながら翌朝死んでいった。

——こんな状態でよいのか、何とかしなければ——という声で大和（やまと）という壁新聞が作られた。毎日の生活の心得や漫画、ダモイ物語、歌、意見等いろいろ書かれた。私も互譲礼節、誠実、和等について投稿した。ところが、この新聞が、反動新聞だといわれ問題となった。私もソ連側の調べに何度か呼び出されたが、別に内容が悪いのではなく、大和という名前が反動的だということでおさまった。

#### ⑨みんなで楽しむ「演劇団」

壁新聞を作る、暖かくはなる、作業ノルマのパーセントも上がる、食糧事情も少しはよくなって、生活もおいおい安定して来た。その頃からソ連も

民主運動を奨励したり抑留者の要求も入れるようになった。余裕が出れば、生活を楽しまたいという欲望がある。抑留者で演劇団をつくってはどうか、ということになって浪花節、講談、漫才、歌、音楽等の得意な者を調査して演劇団をつくった。後に団員は交替で作業を休み練習をすることも許された。

音楽部の活動は大変であった。大工が木をくりぬいてバイオリンの胴部を作り、弦は自動車の運転手（ソ連人）に頼んで針金（細いもの、太いもの）をもらい低、中、高音を出した。弓は樫作業の者が作業の休みに、馬の尻尾の毛を抜いて作った。作詞、作曲者によって歌や曲も出来、楽団の伴奏で毎晩のように歌った。

紫につつじ咲けども 浅みどり白樺しげれど  
故郷（ふるさと） 遠く白雲の  
はるかに望む思い出ぞ

ソ連人は音楽が好きで、毎晩のように聞きに来

病人が作業に出れば、作業する者は病人の面倒を見ながら、病人のノルマーまで要求される。作業中患者が寒いので焚火の所に外套にくるんでおき、休憩で帰って来ると、前に倒れた者は焼け死に、後に倒れた者は凍死している者もあった。作業が終り、病人を背負って宿舎にたどり着いたら、死んでいた者も少なくなかった。

朝の点呼には日直が、寝ている者の頭をたたいて回り、目をあけない者は、死者として裸にされた前の広場に山積みされた。山積みされた死体は、炊事の水くみが桶に入れて山に捨て、その桶に水をくんで来て飲み水や飯炊きに使う有様であった。

この中隊は、二カ月で死亡百四人、体が衰弱して作業の出来ない病人、二百二十人をチタの病院へ送り、残り数十人を第五一八作業大隊の各中隊に送り、改めて各中隊から作業員を補充して作業をしたが、前と同様で死人、病人が続出したため、二十一年三月頃全員引上げた。まるで地獄だ。帰

た。後にソ連の歌の楽譜を取寄せて伴奏したら、カンボーイも検収員も大喜びで歌い、踊った。ヤポンスキーはソ連の歌もわかるか、オーチンハラシヨウ（大変よい）と賞讃された。芝居、講談、漫才、浪花節などを時々日曜日に行った。講談の父帰る、かに工船など働く人民の勝利につながるものが喜ばれた。

#### 五十七地区

この地区は、私達五一八作業大隊ではなく、ハラグン（百五十キロメートルも奥地）の上古大隊から派遣された上滝隊であった。私達より早く入山していた（昭和二十年十月五日入所）。

元来カンボーイは、抑留者を保護するのが任務であるが、検収員と同調し、栄養失調の者、やせ衰え歩行困難な者、回帰熱患者（繰返し熱の出る病気で、シラミなどが病原菌の媒介をする）等、病気に苦しむ患者まで作業に追い出したので、カンボーイや検収員は忌み嫌われ、特に検収員のお婆さんは、鬼婆と恐れられていた。

国の希望も空しく、死んでいった同胞の怨念が、落着くことも出来ずに漂っている五十七地区である。

奇しくも二十二年十月頃、私と同期の吉川さん（三重県）が中心となって、整理作業のため四十人がこの地に派遣された。上滝隊の引き揚げ前の収容所は朽ち果てていたが、私達は新しい別棟に入った。

検収員は前と同じお婆さんで、私は作業班長であり、前のこともあつて心配したが、お婆さんも当時のことを思い出してか、ノルマについては厳格でなく大助かりであった。

#### モクゾン

##### ①移動

昭和二十三年三月頃、第五一八作業大隊の作業も残務整理の段階になり、大部分がモクゾン（ヤブノロワヤの西方約七十キロメートル）に移動した。私達も五十七地区の整理を終えて本隊に追及することになった。最初は客車で行く予定であつ

たが、指揮官が交通費を着服しているので客車でなく、貨物車に便乗することになった。

カンボーイから、大きな機械を積んで駅に止まっている無蓋車に乗れといわれた。シベリアの三月といえばまだ寒い。これに乗って行ったら凍死することは明らかである。「降りると殺すぞ」とカンボーイが無蓋車に乗っている私達に銃を構えている。「仕方がない、殺すわけではないから静かに待って、動き出したら飛び降りよ」といって、寒さに震えながら乗っていた。動き出したから跳び降りた。カンボーイは怒って「なんでもよいからモクゾンまで行け」ということになった。少人数に分かれて有蓋車に乗った。それでも寒くて一晩中震えていた。字が読めないので困ったが、明け方止った駅がモクゾンであった。先発隊が迎えてくれたので大助かりであった。駅で集合し、新しい作業地（駅から三キロメートルぐらい山奥）に行った。山は原始林で、全部伐採するには三年はかかるといわれて、帰国はいつのことかと心配した。

書いてある紙片、遺骨まで容赦なく没収されてしまった。いよいよダモイかな。心ひそかにダモイであることを願った。

ダモイ

### ① 出発

ある日、全員が野外の広場に集められ、ソ連の隊長から正式にダモイの伝達があった。みんな抱きあつて喜んだ。

翌日広場で、最後の装具検査を受け、駅まで三キロメートルの道を歩いたが少しも疲れなかった。すでに列車は引込み線に入っており、順番に貨車に乗った。

列車の中でも、内地の話に花が咲いた。前にいたヤグノロワヤを通過する時は、病魔にたおれて他界し、凍土の下で、慰霊されることもなく、今なお寂しく眠っている者の健康を祈り、黙禱して別れを告げた。

途中ハバロフスクでは、日本新聞社のメッセー

### ② 作業

第五一八作業大隊は、前の作業地ヤブノロワヤで、作業やノルマーを誤魔化したので、その穴埋めに、この原始林で働くのだと、先発隊の専らの噂だった。バレたかと内心心配したが、毎日の検収員、カンボーイの態度から見ても、それほどでもないと思つた。

作業は今までと同様、伐採、樵作業で材木の集積、自動車積込みで集積した材木を駅に送った。ただ、前の地より松の木が少し太いように感じた。作業にも慣れ、ノルマも上がり、検収員も厳しく要求しなくなつたので、生活にも余裕ができ、毎日楽しく暮せるようになった。

昭和二十三年五月下旬、カマンジル当番（私の小隊から出ていた）が、「変だ、六月の作業計画が来ない」といった。各班には急にダモイの噂が広がった。まさかとは思つたが、その頃から何回も装具検査が行われた。いつの検査にも大目に見られていた針、糸、小刀、死亡者の氏名、住所など

ジを受け、答辞の巧拙と民主化の状態によつては、シベリアへの逆戻りもあるといわれたが、別に問題はなく第一関門を無事に通過した。

### ② ナホトカ

長期、貨物列車にゆられてやつとナホトカに着いた。そこでは海岸の天幕生活であった。昼は三キロメートルもある山から、石を運んで来て海に捨てるのが毎日の作業であった。夜は遅くまで、民主的教育の総仕上げといい、インタナシヨナル、赤旗の歌等を競い合つて歌つた。何れも民主化の評価の対象となり、良好な者から帰国させるといつていた。とにかく、朝早くから夜遅くまで戦々恐々として、忙しい毎日であった。

民主化が徹底したと評価された集団、作業能率のよい集団は、第一、第二、第三とスムーズに通過していくが、そうでない集団は、せつかくここまで来ても、またシベリアへ逆戻りすることも少なくなかつた。私達は無事通過して第四分所に入った。ここまで来ればもう大丈夫、逆戻りは絶対

にない。日本から来る迎えの船を待つばかりである。

飢餓、重労働の悪夢もさめ、楽しくゆったりした生活であった。

各県の県人会名簿もそなえてあり、みんな喜んで署名した。名簿には、すでに帰国した知人も大勢いて驚いた。

今日は来るか、明日は来るかと、ただ、ひたすらに帰国船の入港を待ちわびていた。ある日、海のかなたから待望の帰国船が来た。

タラップの登り口でソ連兵が乗船者の名簿を先頭の者に渡し、登り終った所でアメリカ兵に手渡した。一段一段とタラップを登る足も軽やかであり、船上でアメリカ兵の点検を終った時、いよいよ帰国出来るのだと、みんな抱きあって喜んだ。船は静かに、日本海をすべるように舞鶴に向った。

### ③舞鶴

ナホトカを出発した信濃丸は、日本海を静かに進み、まるで夢でも見ているような、感激の船路

であった。

「あつ、日本だ」の声に、みんな甲板にかけ上り、遠くにかすんで見える丹後半島の山々を見つめた。皆の目からは涙、涙、涙。山影もくつきり見えるようになり、船は舞鶴の湾内を静かに棧橋に進んだ。船はドドドツとにぶい音をたてて止り錨がおろされた。

年老いた者、若い者、上級者も下級者も日本のなつかしさに狂喜した。棧橋から一步一步、しっかり踏みしめながら上陸する。故国の土だ！なつかしい日本の土だ！ご苦労様、ご苦労様といって、出迎えてくれた白衣の看護婦さんの姿も、目に痛いほど美しく感じた。上陸後、直ちに入浴し衣類の支給を受け、予防接種、DDTの消毒なども終り、二階の大広間の畳に寝ころんだ時、やっと日本に帰ったという実感が、胸の中にひしひしと感ぜられた。その日こそ忘れもしない、日本晴れの昭和二十三年六月二十七日であった。

### 【執筆者の紹介】

大正十年七月十日

愛知県渥美郡神戸村に生れる

昭和十一年三月

愛知県岡崎市梅園尋常高等小学校高等科卒業

昭和十六年三月

愛知県岡崎師範学校卒業

同年 四月

愛知県渥美郡二川町立二川東部国民学校勤務

昭和十七年一月

現職のまま

福知山中部第六三部隊に入隊

同年 四月

関東軍第九独立守備歩兵第一七大隊に転属

昭和十九年八月

第一〇八師団第二四一連隊第三大隊を編成（阜新市）

昭和二十年八月

武装解除、抑留、入ソ、ゲネラルパーテイ、ハウザンカ、サハリン、五七

地区、モクゾンにて強制労働

ナホトカから舞鶴、復員

昭和二十三年六月

復員後の職歴

昭和二十三年七月

復職して渥美郡内の小、中学校の教諭として勤務

昭和三十三年四月

愛知県教育委員会東三河教育事務所田原駐在員に県職員として勤務

小、中学校教頭、校長として勤務

昭和三十八年四月

停年退職

昭和五十六年三月

賞

平成十年十月

文部省 体育功労賞  
（愛知県 鈴木 英一）